

特67

321

正宗國師兔專使稿

|   |     |
|---|-----|
| 東 | 和書門 |
| 京 | 和文類 |
| 圖 | 函   |
| 書 | 架   |
| 館 | 號   |
|   | 冊   |

019514-000-9

特67-321

正宗國師兔專使稿

惠鶴 / 著

M17.7

ABG-0242



苑專使稿序

華嚴經云菩薩日夜唯願喜法樂法解法行法菩薩如是勤  
 求佛法所有珍財皆無吝惜但於能說法之人生難遭想若  
 聞一何未曾聞法生大歡喜勝得三千大千世界滿中珍寶  
 是故菩薩於內外財為求佛法悉能捨施云云居士妻木棲  
 碧性聰敏官暇好斯文嫻於詞章尤潛心禪理實宰官之菩  
 薩也頃者得吾正宗國師所著兔專使稿反覆熟讀知其深  
 於學道非尋常禪家所及也欲拋財授剏氏泛施于緇素  
 有志者問序於余余曰有之哉居士之芳志乃受而閱之獨  
 妙之活機間出之贈識別出手眼論評外學者之僻見字々

少女、句々色絲、且往々吐先賢未發之確言、宜哉居士生難  
遭想、拋財矣、頗愜鄙懷、因贊囊金口之遠識、有居士題一語  
于卷端云、

明治十七年六月某日

湘江虛舟禪者書于瑞峯之蒼龍窟

正宗國師兔專使稿

今北洪川関

妻木栖碧校

廣瀬某の答ふる書

七月六日之貴書、同じく十九日落手、増々御健達に御勤  
被成候條、珍重之至に候、做慮無恙罷、在候、賢慮を勞せら  
るまじく候、舊冬ハ遠路之處、見事成る濃紙十帶、芳慮に  
かけ、折節書寫之存意有之、好紙渴望之刻、別而悅入  
候、又々此度御念入候御紙面、寔に以て對顔之心地、怡悅  
不淺候、御修行間斷なく御心がけ被成候旨、一段之御事  
に候、依之偶作一篇、和歌一首、再三吟弄仕、御奇特千万よ

存候老父存寄も有之ハ返書に申進候様にとの御事承  
居候兎角三教之學者何れに限らず第一ハ大道の淵源  
よ、一回徹底不仕候てハ何事も夢現の如くよて確と致  
したる心地ハ無之事に候是非ハ一回大道極則之處  
を見徹すべきぞと勇猛の志肝要に候如何して大道に  
ハ徹底すべきぞとならハ只今此文を披覽し或ハハ笑  
ハ或ハ談論する底是心ありや是性なりや青黄赤白な  
りや形ありとやせん形なしとやせん内外中間に在り  
や萬縁ハ應じて了々分明ハ應對する底は何ものぞと  
静處を好まず鬧處を棄てて打返しく、幾度も點檢可

成候深く吟じ入候へハ只空廓虛凝にして身心共ハ輕  
く生もなく死もなく徒ハ了々分明なる計りに罷成る事  
ハ候往々ハ此處を認て大悟と相心得申者間多く候是  
ハ識神を認得する底の大癡人也と長沙大師も仰られ  
たる事ハて、大き成錯ハ候此時少しも歡喜を生せず僧趙  
州ハ問う狗子ハ還而佛性ありや否や州曰無は何の道  
理ぞと晝夜ハ參窮可被成候親切の工夫現前致候へハ  
瑠璃瓶裏ハ入るか如く金剛圈中ハ投するよ似て、只茫  
然と罷成事ハ候此時容さば隨分精彩を著參窮致候へ  
ハ參窮底の言句ハ和して身心共ハ打失したる心地なる

可候、恐怖を生せず、間も無く進み候へは、忽然として、一夜も二夜も寝付れざる程の大歡喜可有之候、是れ彼の鳳金網を離れ、鶴籠を抛つ底の時節、窮する時と變ず、變する時の通ずとい、此等の趣は候、此は於て孔夫子の一貫、孟軻氏の浩然祭乎として、目前は分明ある可候、此時從前手前よて、彼是了、被致候事共、腹を抱て大笑する程、無調法成不覺悟よて可有之候、此處をこぼ、朱子の力をを用る事久して、一旦豁然貫通すとい申され候へ、晦庵も前方密々、參禪工夫せられたる仁の由、一旦入理の得力の紛れもあき仁と相見へ申候、然れ共猶最後

兩重の關鎖を隔て、祖庭を天涯遙なる事、候、乍去當時儒釋の學者の及ふべき事ならに候、去る程、漢儒唐儒も説き及ぼさざる見處有て、恣に聖經賢典を註解し、令名を宇内、施されたる事、候、雲谷の隆禪師も、正直篇といへる一卷の書、念頃、評判被致候、近代朱子流の學を嫌ふ人々も、多く候、由、夫の中々、狹々、敷了簡、候、聖人の常の師、候、と申事の侍れ、朱子に限らに、婦人小子の語と雖も、實學の助け成らんよと、捨置らす工夫を下して、力を得る様、よ心懸け候を、こぼ、學を好む共、達人とも可申候へ、只手前の淺てかなる了簡を、恃みて、先賢

を輕無し、契てぬ小智を飾りて、彼此評判致候半ハ片腹  
いたきこと共に候、遠季末代の風俗、儒者も佛者も精神  
軟弱に、根機下劣にして、世智濃厚、實徳薄く、易を好て  
難を恐れ、淺く走て、深を棄て、近を執て、遠を顧こず、只道て  
君臣父子彝倫の間を出せずと計心得て、上もなき聖經  
賢典を判棄し、及びもなき實徳純善の君子を捉へて、唐  
宋の儒者ハ取るよ足すなき沙汰致し、甚敷者と孔孟以  
來、正見底の人なしとす、特に知トす、漢ハ傳毅あり、牟子  
あり、吳ハ大傳闕澤あり、晋ハ隆遺民あり、陶元亮あり、唐  
ハ虞世南杜如晦あり、房玄齡、蕭瑀、廷あり、彼の善愚大士

李長者及び寒拾二賢士の如きハ、各大權の垂跡、輔處の化  
現よして、是を散聖と道ふ、凡愚の輩の亂りよ可否すへ  
さ類にあつて、龐道玄、李附馬、揚大年、陳尙書等の四君の  
如きハ、見道分明よして、精く參禪の玄微を盡せり、四海  
の衲子、天下の老和尚、其名を聞く時ハ、牙戦き、股震ふ、郭  
功甫、張商英、又是に次けり、張拙秀才、陸巨大夫、光美、裴相  
國、獻齊、林先生、白居易、周惇頤の諸君子及び二程あり、三  
蘇あり、張九成、呂居仁等の諸老儒、漢唐より宋明よ到て、  
俊才星の如くよ列り、賢良基の如くよ敷く、精しく儒域  
の堂奥を窺ひ、深く禪海の源底を探る、今時儒釋の學者、

佗の杖屨は待する事も亦能はじ、夫子の道若し今の人々の心得られし如く、舜倫の間のみならずは、顔子の陋巷は道れて枯淡を嘗め、憲の漏室は潜んで窮困を守られし、怪しき働は待らずや、然るを夫子は、回や三月仁は違はばと賞美し玉ひし、如何ある聖慮めて候や、但し夫子も二資も、舜倫の間有ることを知り玉とすとせんか、我も全く舜倫の間に道無しと道ふよあらず、舜倫の間のみあり、外は求むることを待さずといえん、不可あり、人將た云はん、古の聖賢、何う道を離るゝことを恐れさるや、大舜も須臾も離るへからざる道

を離れて、湘水は逝いて空敷一雙の緑竹を留め、大禹の須臾も離るべからざる道を離して、浩水は外は在る者三年、文王の須臾も離るべからざる道を離して、差里の囚と成り、大公の須臾も離るべからざる道を離して、滑水は釣し、周公の須臾も離るべからざる道を離して、上帝は仕へんことを求め、夷齊の嶽を首陽に折り、李聃の青牛は跨つて函關を出て、亞飯干は楚に適き、三飯繚は蔡に適く、孔子は糧を陳蔡に断ち、孟軻は轍天下を周り、子路は衛國に義死し、百里奚は虞を棄て、秦に入り、季札は別國は使し、靈均は汨水は沈み、退之は潮州は左遷せ

らる、其餘の孔門三千の英豪、皆是須臾も離るべからざる道を離れ、來つて孔子を學ぶ、古の道を離るゝ人多く、ハ聖賢の名あり、今長安の豪家、富人の子弟を、見に妻孥の愛ひひかれて、室家を離るゝこと、片時も忍ひざる者あり、彼をまた道を好むこと、聖賢に勝れりとせんか、且其れ道の士庶人への足りて、聖賢への還て、乏敷物と云はんか、彼の浮圖氏の彝倫を離れて道を求むる、是又甚惡むべからざる者、似たり、若又果して彝倫の間のみにありとあらば、君子百里、使する時よ、君臣父子を離れて遠く逝く、道と疎濶すること、百里すといはんか、君

子千里、使する時よ、夫婦昆弟を離れて遠く征く、道と別離すること、千里すとせんか、須臾も離るべからざるの大道、百里の塚店を隔て、千里の峻岨を挟む、獼猴の林樹を離るゝが如く、魚鼈の海水を出るよ似て、大い力を失せんら、夫子魯を去つて、衛及び陳よ適く、時よ其の從者の顔淵、閔子騫、子由、子夏の門弟子のこ、須臾も離るべからざる物を如何、大夫の車何り、君臣父子を載せざる、怪い哉、外よ求めざるの大道への何等の物をや、雲烟の如く、あらして、君臣父子の間よ混交するものか、將又月暈の如く、あらして、夫婦昆弟の間を環抱する者歟、顔子既よ彝



倫を離れて陋巷に居す、是総も道を顧こさる者とせん  
ら、回や三月仁は違ふと侍るぞや、夫子の所謂仁は、彼  
の顔子の所謂前は在るふとすれは、忽焉として後、在  
る底の大道はあらはや、此時舜倫の大道、顔子を慕つて、  
竊に來つて陋巷に在る者三月、回をして仁は違ふとせしめ  
さるら、將又顔子大道を慕つて、家に歸ること三月、夫婦  
昆弟の間は交つて、仁は違ふとさることを得るら、或人曰  
く、忽焉の語は、回ら未だ道を見さる時の語なりと、怪哉  
回未だ道を見すして、何等の物を指して、此の鬼怪の  
言を出たすや、醉夢の狂言は、疫熱の譫語は、纒は二万三

千字の金文、未だ道を見さる底の、門人の閑語を載せ得  
て何の用を、特は知らは、顔回三月仁は違ふとして、初て  
者般の親切の語を説得來る、其餘の七十子の夢はも曾  
て未だ見さる處なることを、夫子常は孝弟忠信を體し  
て弟子に教ふ、吝まさること水火の如し、然るを子貢云  
ふは、夫子の言、性與天道得て聞くべからはと、晦庵下  
面は註解して曰く、性與天道は至ては、夫子罕は是を道  
ふのこと、怪哉道若し舜倫の間は足れらば罕は云ふと  
は、何れの道ぞ、或人曰く、夫子の道は人道なり、天道は罕  
れぬふらくのこと、子が曰く、然らば即ち、天道の前は高

遠の處よ在て、人道と天道とを卵肉の黄白相分るる如く、宇宙の間よ兩道有りとするら、夫子曰く、我道一以て之を貫せりと、是又何れの道と、天道と人道と貫通せる底の我道と、伊の三点の如く各立せりとするら、嗟、人道を見ざる時、見地明らならぬ、明らあらざる時の中心疑つて決せず、決せざる時、言語必ず支離す、如らじ一回大道を見徹して、平生を輕快おせんよと、熱々思ふに罕み道ふの語と、朱貢二子の心よして、必ず夫子の心あらじ、夫を夫子の道よ於ける、融鎔無碍、玉盤明珠を走らしむ、光々映徹すること、一器の水を江湖よ投するが如

く、纖毫はかりも縫罅あり、純々焉たり、混々乎たり、偃伸屈伸、咳唾掉臂、認み是大道ある者の特り、只夫子歟、里仁郷黨の二篇の如き、佛の法華有るが如し、是を讀むよ、覺へば人の心をして消和せしむること、朝曦の霜露に於けるが如し、千載の下、巖然として在すが如し、縦ひ海口も賛歎し及さざり、然るを今時往々に道ふ、里郷の二篇の、孔夫子恭謙閑雅の態度、風流温籍の體裁よして、聖徳の餘波枝葉なり、講するよ足らざるを錯れるよあらざるや、夫子曰く、我爾み隠すことなると、隠さくる底は何ぞ、學者尋常此語を三復せば、必を里郷の二篇、常情の量るべ

きよ非ざることを覺得せん、而後お罕れお性と天道とを道ふの語、果して夫子の心おあらざることを了知せん、古へ我の禪を學して、儒を明らめざる者也と申置れし先賢も是あるよし承及候、是實に自性の本源に徹し、大道の玄微を洞照し、儒教の淵源に貫通したる者にて、寔に人中の英傑なり、何を以てり是を知るとあらば、夫禪の會し難きこと、中々庸才懦弱の士の及ぶべき事あらす候、然るを信得及し透得過する底の人、三教の間に毫釐も疑滯是あるまじきこと、少しも參禪の覺はあらん人の怪み疑はざる事に候、大凡佛理の源底を究む

る時の、必ず仁道の本源に徹底すること必然の義に候、然るに仁の中下の士の努々量り知るべき事あらは候、韓愈がいはいゆる博愛是を仁と云ふ等の顯々しき事お侍らす、孔子も敬し慎み玉ひし大事にて候、去るお依て、孟武伯子由、公西華等の人々をさへ仁を知れりといひ許可し給はす、斯く云へばとて、貴翁も今日より禪學に入り給へ、坐禪し玉へとて例の浮圖氏の癖にて勧め申よ、侍らす縦ひ貴翁禪學し玉ひて、大智眼を開き大歡喜を得玉ひとりとも、左のみ佛法の大覺明と申おも無之禪道の大威徳と申にお侍らす、斯まで汗水出して書

付参らすべき事にも侍らす、去あがら貴翁も一方の人  
傑にて、年久敷三教の間に心を寄せられ、修練の志も遠  
ららぬ人あて侍れば、逆もの事に大道の本源に徹し、仁  
義の淵底を明らめ、量らす大怡悦を得て、安堵の眉を開  
き玉へかゝるとの方寸の親切にて、只今迄の御修行にて  
の、一生墓々敷御得力の努々これあるまじく候、晦庵云  
く、異端虚無寂滅の教、其高さこと大學よ過ぎたも共實  
なるとい、是晦庵排佛の暗疾妬害の陋臆より起つて、取  
るあ足らざる鄙詞なり、尋ぬるに夫、真如海廣く、法性天  
廓あり、大千を漚沫に属し、賢聖を電拂に空す、狭小無智

の輩、俄よ是を聞らば、誰ら驚怖せさらんや、譬バ彼の海  
島邊郷の細民、深山三家の野人よまで、長安豪家の富貴、  
帝都樓觀の莊麗を談せば、驚疑して必き道はん、其麗し  
きこと草舎よ過ぎされ共實あしと、豪家の野人の疑怪  
を恐れて毀つべからず、豈帝都の科あらんや、彼の舊井  
田疇の蝦蟇、山溪汚池の鱸魚あ對して、北海の波瀾、南溟  
の浩渺を談せば、必す疑ひ恐れて言はん、蛟龍海若、南溟  
の體、其大なること池井に過ぎたれ共實あしと、豈江海  
の罪あらんや、江海鱸魚を恐れて縮むべからず、佛よ半  
滿權實の經卷あれ共、高さを談せず、低さを説す、只末代

の行人をして、高からず低からざる底の、本具の大道を知らしめんとす、根熟大機の衆生を化するふ、方廣華嚴の大旗を弄し、珍御寶聚の大衣を著て、小根劣機の衆生を化するよ、鹿苑草舎の小乗を談し、鹿弊垢膩の衣を纏ふ、有爲住相の衆生を化するよ、寂滅無相の空理を談す、高蹈驕奢の異學を化するに、高廣寛大の法體を示す、大凡八万四千種の法門有て、無量解脱の妙義を具せり、是を利生の法財と道ふ譬の世の良醫の肩輿に駕して、無心にして即ち行、胸中初より一方かち、病床に近き強弱を見、九候を窺ひ五内を察して、而後に種々の方劑を現

す、其補瀉温涼を病者にあつらくのこ、豈一方を以て良醫を誘して可あらんや、或は王者の叛國を問はんあために、王庫數千種の兵器あるり如し、夫兵の不祥の器にして止事を得ざる時の用ふ、豈王者の常からんや、法財も亦然り、豈佛の常からんや、文公大小大の老儒、惜しむへし排佛の妬眼、佛道の高明あるを明らめず、識量狭して、大學の寛宏あるを量らす、若大學の高明なるを明らめし、何を佛道の高明あるを恠まん、佛道の寛宏あるを量らば、何を大學の寛宏なるを知らざらん、彼の諸法寂滅の所説の如き、有爲住相の衆生のために設く、有爲

住相の病愈いよハ、何ぞ寂滅の藥を留めん、然るを寂滅の所  
説を以て、佛教を高たかしとして是をさこそせは、衆盲の象ぞうを  
探つて、終に全象を見る事能あたはさるゝ如し、夫れ山は頂  
を窮めざれば、遠きを見る事能あたはず、海は底そこを尽さざれ  
ば、深きを量ること能あたはず、佛教は高たかしとして忌棄いひそて、道  
教は深しとして恐れ避け、夫子の道は舜倫の間を出す  
として、徒に蠶々碌々として、飽暖ほうだんのこを求めて、内妻孥  
の愛に牽ひかれ、外利名の私に蓋おほはれて、舊に依て只是一箇  
鄙俗の凡愚、何の力有つてり、君を堯舜ぎょうしんの君にし、民を堯  
舜の民とする底の盛事あらんや、寔に笑つへし、大丈夫

兒、學はぎんすまはちやひハ則已矣、若も一日も學ぶとあらば、高を窮め  
深を探つて、誓て大道の源底に徹し、人欲の私を尽して、  
人に過すまたる智見を具して、能人よきを教へ、衆たよ超こゆるたる識  
量有つて、能衆よきを導く、夫惟ただ也なりハ、人道を見ざる時ハ、其志  
高からず、凡愚の舊習に牽かれ、鄙俗の情念に蓋おほはれて、  
彼の人欲の私に勝かつこと能あたはせ、四端を養ひ得て能仁  
よ能義よきならまく欲りすと雖も得べけんや、君子ハ然ら  
せ、能高遠を窮めて近習を教ひ、能寛大を尽して鄙微ひびを  
助たすく、是故よ上世の聖君明主、尊を屈かして卑に附き、己を  
虚たひして士たひ下り、惟道たう是求こむ、黃帝ハ三七齋戒して道

を黃成子に問ひ、且大真に學ぶ、堯に伊壽に學び、舜の務成附に學び、禹の西王口に學び、湯の威子伯に學び、文王の郭政に學び、周公の大公望に學び、孔子の周に行いて禮を老聃に學び、孟軻の業を子思の門人に受く、君看よ、從上安行生知の彦聖なるすら、學を好むこと斯の如し、豈夫空敷彝倫の間を出でずと云つて、道を求めず、學を修せず、面に牆として一生を錯る者ならんや、須らく知るべし、苦しみ勤めて道を求め、而後凡にあらす聖にあらず、眼横鼻直進勵んで學を究め、而後智にあらす愚にあらず、喫茶喫飯、只是尋常無事高閑底の一老翁ある

ことを、此に於て室家宜しく、鄉黨に宜しくして、能君臣父子夫婦昆弟の間を治む、縦ひ王侯の傍に在て、天下の政事を佐くと云ふとも、何の不足の處か、是あらん、君信じ臣敬し、士伏し民懷く、位人臣の頂を極むと云ふとも、誰か怪むことを得んや、國強く民康し、寔に人中の龍鳳なり、是大丈夫萬夫に傑出する者の、懷とする處にして、宋朝の張商英無盡居士の如きは、是其人也、官宰相のに登り、壽百齡に近くして、天下を泰山の安に置、是彼の先に所謂禪を學して、儒を明むる底の名教の老君子、佗をして禪を説しむれば、衲僧眉を皺め、三賢四果膽魂を驚

落す、今時儒釋の學人、百端を究めて窺ひ探ると雖も、佗家の門閭戸庭も亦臨見ること能はず、背後より立つおとも又得じ、末代の悲しき人、毎ふ外學を勤めて、却つて實徳を排せんとす、佛者の儒人に交るを見て、喬木を下るの意を爲し、儒人の佛者より交るを見て、幽谷に入る思を生ず、特よ知らず、人々儒佛の名を以て染汚すべからざる實徳あるおとを、夫も人の性の上より一物を添ふべからず、恰も紅爐の片雪の如し、但儒佛の名にして皮毛の如し、大道の實にして骨髓の如し、有道の士の、大道の骨髓のみを見て、皮毛の儒佛有ることを見ず、輕

薄の族の、骨髓の大道を求めず、却て皮毛の儒佛を隔つ、甚しき者の、恰も寇讎の如くす、是誰か過ぞや、只是古學亡びて至道隠れ、鄙習盛にして實徳を棄るか致す所かり、公も亦他日功充ち學成せん時、儒あること勿し、佛なるおと勿れ、名も無き自性を捉へて、儒と名け佛と稱する者の、好箇娘生の好面皮、人を備ひて苦るに黥するが如く、好肉を剗て瘡を生じて、自ら己命を喪するに似たり、往々に儒人の錯つて、儒にも非ざる心性を捉へて、強て拗へて、我の是儒なりと稱して佛老を譏敗し、佛者の錯つて、佛も非る明德を捉へて、強て拗へて、我の是佛



者ありと稱して儒門を輕賤す、點檢し見來れば、總に是  
大道の本根を見ず、自心の玄微を窺ひ知らざるが致す  
所にして、學力淺薄あるの驗也、豈知すや、人々本具の佛  
性の、是を菩提と名け涅槃と稱し、儒門の是を至道と名  
づけ明德と稱す、李聃の虛玄と名づけ、孟軻の浩然と云  
ふ、各々の所見、淺深なき非され共、是只一也、一なりと  
雖も、諸稱一つも相當らず、是を儒なりと云えんとすれ  
ば、丈夫面上眉を畫が如く、是を佛なりと云はんとすれ  
ば、新婦頷下よ鬚を裁るが如し、傍觀腹を抱へつべし、儒  
よ非す佛にあらすして、能仁も能義なる物の、其只心性

か、徳天地と齊しくして邊表を見ず、明日月に並んで終  
始あぐ、天地と參なる底の大物あり、儒釋の間は隱藏す  
べかたを、陰陽を吞吐し、造化を收放し、秋葉春花、皆佗の  
恩力を受く、是故に道ふ、聖人の有言の天地なり、天地の  
無言の聖人なりと、自ら佛と稱し自ら儒と稱する者の、  
耶を呼で奴と爲す、終に實徳を失し、覺えず、二教の區域  
に投入して、互に吳越相隔つ、錯れるおぼらすや、然りと  
雖も、儒を廢し佛を除きて、而後お道を知りとするに  
の非ぞ、夫れ儒佛の二教世お行おれて、並び貴きこと、の  
上政化を輔け、下國家に利あるの大器あり、此任に處す

るの人、豈容易ならんや、苦み勤て一旦心地開明し、智光  
煥發し、理事貫通し、物我冥合せざる時の、彼の人欲の私  
み克つこと能はず、縦ひ才藝侘み越へ、七尺の身財有て、  
學西長を究むと雖も、只是少しく文字を解する底の凡  
愚、何の實徳有あつてか、人世を利する底の盛事あらん  
や、若人參禪苦學し、見性了々分明あして、掌を見るが如  
く、而後よ人を利するよ便あらば、儒と道はんも亦可あ  
り、佛と道てんも亦可なり、莊老列と稱せん亦可なり、若  
まゝ毫釐も見道の力無くして、亂りみ輕薄の凡解を恃  
まば、儒と稱せんも是不可、佛と稱せん又不可、莊老列と

稱せん、總よ不可、是にもせよ非みもあざ、侘人の極則と  
する所を捉へて一回見徹し、唐儒宋儒の力を尽しとる  
處を、底よ徹して見得透し畢て、其上の取捨ハ手前の心  
次第の候、左も無之、只推量の分際あて、彼是了簡被致候  
てハ、達人とハ申されず候、末代の弊風にて、儒釋ともハ  
平常無事を貫しとして、妄想の窠窟に困屈して、學業廢  
れ果、此文喪尽すること、寔に以て苦々敷事共に候、近代  
神家者流、及び儒人と稱する者を、とへに、纔に七五卷の  
書冊を讀三五月の賣講を聞く時の、妬火竊に起り、嫉妬  
俄み熾よして、排佛を以て急務とす、嗟佛の稱よ於る、何

の科まかある、佛ぶつは於る、何の冤うらみか有る、只是暫時の妬  
忌ねたみ蓋おほされ、神理の如何を辨わきまへす、佛乘の如何を察せざ  
るの致す所なり、原たづねるに夫そも、佛の三世貫通せる大聖か  
り、神も、亦三世洞明、佛と異なることか、是内秘同體ある  
が故あり、顧たもふに夫それ、我六十州の扶桑八萬區の鎮座有  
つて、高明の徳を懷いだり、靈驗妙應寔まことに在すが如し、佛日桑  
枝えだの上りてより、後千有餘歳、豈八萬軀の佛像のみあら  
んや、豈千万軸の經卷のみならんや、是本迹不二、水波同  
體なる者ものはあらずや、佛教若國家に害あり、生民は利あ  
らずとせば、土は是神の國なり、人は是神の民なり、何の

欽あこむ所有てか、坐ながらおして是を見んや、蓋神是を忌  
むと雖も、拒むこと能はず、千載の下、諸君の力を借て是  
を妬害すとあさんや、若又儒人の排佛の志を束つかねて、道  
徳仁義の上に置き、神家の排佛の志を收めて、内秘神理  
の玄奥を窮きめば、惟徳日々ひたひたお高くして、祥しあわせを子孫こぞに貽たのさ  
ん、是良策よきさくはあらずや、昨處きのう士あり、予が室を扣たたいて再拜  
して告て曰く、近頃僕讀書の暇いとま、少すこしく清坐を學まなはんぞ  
す、動うごかす静しずまは人欲の制とどめ難むづかきこと、狄國ていこくを治さむるが如し、一  
日治さむれば五日亂る、片時静しずかにして長時動うごく、尋たづねる時ときの  
痕迹あとあは、爵祿しやくりくをも辭かたすべく、白刃はくじんをも踏ふみつべし、人欲

をば制すべからず、僕是がさめに困倦せられて起つことを得ず、大師願くは哀憫して開示し玉へと、予が曰く、嗟、其事あらん、今時儒佛の學人、是がさめに災厄せられて、克得ることなし、古人の能其病因を知て本根を抜く、今人の病因を知らざるが故、醫治すること能はず、終に死亡を取る、死亡を取るとい、棄廢して本志を失ふなり、處士の曰く、得て聞つべしや、予が曰く、儒門は是を人欲と云ひ、釋氏の是を結使の煩惱と云ふ、共は一箇の舊習習氣あり、常に根本無明の中に入りて竄る、是故に制し得ることを得ず、今時禪道佛法を修習する底、此黨

間々多し、是を二乘聲聞の部類と云ふ、彼が言ふ曰く、道の高遠なることあり、行住坐臥の間を出ず、火の暖み水の冷し、只分別思想を盡さば足れらくのみ、何の參禪辨道をか假らんと、彼の儒者家流の、道の彝倫の間を出で、と云ふ輩と同一模範あり、是を點慧と名づけ、病因と云ふ、道を見ざるを病本とす、夫人道を見る時の、結使斷し人欲盡く、譬は夜途人あり、妖魅のため、欺誑せられて、衆苦逼迫せんに、觸目皆妖魅として、迴避する處あり、多し、漸く天明よ到て、大陽纔よ照す時の、群妖百怪悉く潜み隠れて、搜索すれ共得ず、寔に睡夢の覺るが如し、須

らく、知るべし、妖魅を拂ふことの大陽は過ぎたるは無く、人欲を制することの大道は越えざるはあきことを、人若道を見ざる時の、人欲の結使、根本無明の中に入つて竄れ、頼耶含識の間を潜んで、動もされば六賊を促ひ、八邪を引きて、千變萬化、靈臺を混亂せ、心王はがさめお欺誑せられて安きこと能くを、觸目皆業障輪廻と化す、恰も妖魅の夜途を悩すが如し、一旦智光淵發し、大道乍ち轉出する時の、惠日大に照耀して、大地山河本有の明德と化し、毘盧の全身と現す八識崩裂け無明碎破る、此に於て、結使斷し人欲盡く、賊壘破て群賊亡ぶるが如し、

業障輪廻土を拂て、點塵なし、夫子の是を性への近し、習則遠しと宣ひき、是故に少室曰く、若人佛道を成せんと欲せば、先須らく見性すべしと、譬は人あり夢中に種々の苦患を受んぬ、百端を究むと雖も、夢中に在ての救ふおとを得ず、夢中の苦を遁れんとならば、夢を醒ますよ如し、今時儒釋の學人、大道を見せして煩惱を斷せんとし、人欲を克さんとす、恰も夢中よ在て、種々方便して、夢中の苦患を遁れんとするが如し、轉々苦患を増すのみ、罪の淵源を徹せき、相似口傳の道を以て得たりとす、有るのみ、或は涸轍の魚の、一口の水を足れりとす

て、大海を求めざるが如し、寶藏論に、此等の人を小しき  
安くして、大いよ安きことを知らず、癡鳥の窟に栖みて、  
深林を求めざるの喩ふ、蓋道の稲梁に喩へ、人欲の稗稊  
に喩ふ、稗稊叢茂する時の稲梁おのづから盡く、稲梁叢  
茂する時の稗稊自ら隠る、此故に稗稊を盡さんと欲せ  
ば、須らく稲梁を養ふべし、人欲を制せんと欲せば、道を  
見るよ如き稲梁若稗稊の底に蔓理せられて、然して稗  
稊を制せんと欲すと雖も得べけんや、恰も人の人欲の  
底に蓋覆せられて、人欲を制せんとするが如し、愚者の  
常に山河大地を全くして、人欲の苦域と爲し、智者の常

よ山河大地を全くして、大道の眞體とし、己靈の明德と  
す、吾子若し人欲を制せんと欲せば、急よ須らく道を見  
るべし、是を病因を知り、病本を抜くと云ふ、處士欣然と  
して去る、是又暫時の拙語と雖も、少しき道理かさに非  
き、此故に書付進じ申候、別紙に御書付被遣候、偶作の詩  
の大略能御座候、趙州無の字の拈提は、更々相届不申候、  
誠に實參實悟とこそ申候へ、隨分親切に參究可被成候、  
古の禪林、眞風未だ地に落ちざりし時、眞正參玄の上士  
の如き、如此少分の相應を以て足れりとせき、自の得  
力の眞偽如何を辨せんがため、箇の難透の話頭を把

つて看過す、如何となれば、玉の火を以て試み、金の石を以て試み、木の杖を以て試み、人の言葉を以て試む、是叢社の古實あり、既に是佛祖の心を明らむ、何ぞ佛祖の語を會せんらん、南泉一株の花、乾峯三種の病、趙州青州の布衫、陳操行脚の僧、是を法窟の爪牙と名け、奪命の神符と云ふ、如上の毒焰に於て、毫釐も疑情あらば、生冤家の如く去て、豎に咬み横に爛嚼して、一旦不合に通身白汗流れて、爆然として咬著破せば、多少惡毒の難所、萬里の異郷に妻子の面を見るが如けん、是則真正大事了畢、因地一下底の時節、初て大安樂大解脫の田地に到れり

とす、四海に横行して獅子の遊行するが如く、獨歩無畏ならん、千七百箇の善知識と稱して、點滴も施さざして、大法施を行して、衲子も慚ることなけん、若此古實に達せざ、徒よ口耳皮薄の禪を傳へて、見聞覺知を認め得て足れりとせば、終に人情下劣の阿師と成て、處々に於て藥汞相似の禪を説いて、多少學人の悟門を妨碍せん、悲哉皮禪一とび耳に落きば、學者一生痛快に打發すること能はざ、恐れても恐るべきは、平常說破の一路なり、是を無禪草裏の禪と云ふ、學者一回此門に填入する時、祖關難透の殺所に到つて、死に到るまで打脫すること

能のき、恰も炮硝を平地に盛り、火を放つて鐵丸を飛ば  
はんとするが如し、硝煙廣野に盈つと雖も、丸子に依然  
として、舊處に在るらくのみ、特り大勇猛の上士有つて、  
一則難透の狼毒語を執つて、舊見を放下し、大疑團を起  
して、單々よ參究して、生蛇竹筒に入るが如く去るをば  
閣て論せき、恐らくは、竹筒に入去ること能はざらんこと  
を、和歌の無案内に候へ共、返の真似仕進申候、

瓢箪の、うきぬちづみぬちづらしや、只つきのなしを果てこそ、  
右の返、吟弄の後、斷滅空の御氣遣、必々御無用な候、修行  
者の一旦斷滅空の土底へ深く落入不申候ては、中々確

と致したる得力の出来申さゝることよ候、申迄も無之  
候へ共、誓て大丈夫の志氣を憤發して、是非一〇一回冷  
暖自知せまは置まじきごと、勇猛の御志肝要な候、自の  
心上の一件よて侍れば、唐天然の事を尋ね申程、六箇敷  
ことにも無之候、左もかく候ては、一生眞實御安堵の時  
節に有之間敷候、唯返々も遠方にて、時々御目お懸らば  
候こと残念の至に候、此上思召も出来候は、御遠慮お  
く可被仰聞候、幾度も可申承候、道中便にては、何方まで  
頼遣し申候へば、貴翁の御役所まで相届申候哉、重ての  
便に書付可給候、此狀急便故、清書も不仕進じ申候、卒畧



の書まね面御免可蒙候、恐惶小布、 月 日

廣瀬典先生蒲右

聞提窟老翁

此法語は、國師の親書にて、久しく世に傳ふるものありと雖も、老後の卒筆は係れる故か、字體往々分明を欠く所あり、因て今竊にこれを正し、且つ閱を洪川禪師に請ひ、新たに印刷して讀者に便すと云、

校 者 識

明治十七年七月十七日御届

著 者

正宗國師惠鶴

東京府士族

出版人 妻 木 頼 矩

東京牛込區築土前町九番地

此本係施品

